



赤砂利遺跡は、大宮台地の東部（慈恩寺支台）に位置します。遺跡の南側は、かつて大日沼と呼ばれた沼地と、西側に続く日川低地に面しています。遺跡は隼人堀川によって二分されていますが、台地の縁辺まで広がっています。

これまでに 7 回の発掘調査が行われ、縄文時代中期（今から約 4, 5 0 0 年前）の集落跡と大徳寺を中心とした中世の遺跡であることがわかっています。

今回の発掘調査は隼人堀川の河川改修に伴うもので、河川に沿って順次進められています。今までの調査で縄文時代中期の大規模集落の中心部の様子が明らかになってきました。

今回発見された遺構は縄文時代中期後半の堅穴住居跡 1 6 軒、土壇 9 5 基ほどで、現在も発掘調査中です。



赤砂利遺跡（第8次）の これまでの発掘成果

どこう
あさばち
円形の土壇の中から出てきた浅鉢形土器です。土壇の深さは1mほどで、底面には炭化物が多く見られました。食用の木の実などが炭化してたまったものようです。



単独で埋められていた大型の深鉢形土器です。逆さに埋められ、壊れた破片が中に落ち込んでいたので、内部は空洞になっていたようです。



縄文時代中期末の竪穴住居跡で、2軒重なり合っています。奥の住居跡のほうが新しく、炉跡（囲炉裏）の東脇に両耳壺が、さらに東の出入り口に深鉢形土器が埋められていました。



台地から低地に向かう斜面の途中にも竪穴住居跡が発見されました。この住居跡の炉跡は土器で囲われていました。



掘込みが深い隅丸方形の形をした竪穴住居跡です。柱は4本柱で、中央の炉跡は一部が石で囲われていました。



台地から低地に向かう細い谷地形です。谷が埋まる途中で縄文時代後期（約3500年前）の土器が多量に捨てられた状態で発見されました。